

医療面接法「半構造化インタビュー」による初診患者の感情（心理的背景）の抽出に関する研究

○福原 稔^{1,2)}, 福原早紀^{1,2)}, 田村達二郎²⁾, 森岡 敦²⁾, 文元基宝²⁾
¹⁾フクハラ歯科医院, ²⁾関西ウエルビーイングクラブ

要約：「半構造化インタビュー」(KWCで開発したパターン化された質問法)を用いおおむね5分以内に145名の初診・再初診患者から16種類の派生感情を抽出できた。患者の心理的背景の多様さゆえに、医療者がこれを理解する必要性が示唆された。はじめに：患者の生物学的背景とともに、心理社会的背景の理解は医学的診断、患者と医療者の信頼関係の構築など治療を進める上での基礎となる。しかし、必要性の認識の低さ、時間的制約やコミュニケーション技法等の問題がある。そこでKWCではパターン化された質問を用い短時間に心理社会的背景を把握することを試みた。「半構造化インタビュー」の概要：初診時、傾聴や受容の姿勢で、客観的要素として「事実」「対処行動」、主観的要素として「価値観」「感情」を聴く。事実として来院理由を明確化しながら聞き、疾病解釈モデルを使って「原因」「直接的影響」「重大さの捉え」などを聴ききくことで解釈・価値観を知る。「対処行動」と「効果」を聴く。ポイントとなる部分での感情をたずねる。これらの内容を要約し来院動機・プロセスとして患者・医療者が共有する。(索引用語：半構造化インタビュー, 医療面接, 生物心理社会的モデル)

口腔衛生会誌 55 (4), 2005

目的：

感情を本技法で抽出し、基本感情と派生感情に分類する。日常臨床で実践可能な短時間化の試みを所要時間で検討する。

方法：

平成17年2月から4ヶ月間、3歯科医院の初診・再初診患者(20歳以上)189名に対して、本法を用いインタビューした。感情は、参考文献1)の感情ガイドライン表にて基本感情「喜び」「悲しさ」「不安」「怒り」に分けた。また派生感情を分類して集計した。所要時間は感情が抽出できた中から116ケースで集計した。

結果および考察：

来院者189名のうち感情が抽出できたのは76.7% (145名)。基本感情(n=145)は「不安」59.3%、「悲しさ」17.9%、「怒り」16.6%、「喜び」6.2%であった。派生感情(n=145)では「心配・気がかり」38.6%、「焦り」11.0%、「怖い」9.0%、「後悔」9.0%と続いた。全部で16種類の派生感情が抽出できた。81.0%(n=116)のケースが5分以内で感情の抽出ができていた。医療者の解釈で患者の感情を把握しているので治療継続の中で確認、修正が必要と思う。来院者の感情の量的な把握の中で、感情の多様性に気づいた。不安や焦り、怖さなどは予想されたが、「喜び」の期待・安心・治療に対する決

意や、無力感・情けなさという感情、また不満・自己嫌悪・処置に関する拒否感といった感情など、さまざまな感情があることを知りえた。臨床の制約の中で、少しでも患者の主観の世界に踏み込むことは、患者を理解するため必要であると感じた。

参考文献：

- 1) 宗像常次ほか：ヘルスカウンセリングテキスト Volume 1ヘルスカウンセリングセンターインターナショナル2版。2001, 67頁。
- 2) 文元基宝ほか：患者の内なるニーズに迫る。歯科衛生士29(4)：13-31, 2005。

基本感情の4分類 (n=145) ケース数(%)	派生感情の分類 (n=145) ケース数(%)				
	期待	安心	決意		
喜び 9(6.29%)	53.3%	32.1%	10.7%		
悲しさ 26(17.9%)	あきらめ 12(8.3%)	困る 6(4.1%)	無力感・面倒 5(3.4%)	情けない 3(2.1%)	
不安 86(59.3%)	心配 56(38.6%)	あせり 18(11.0%)	悔い 13(9.0%)	混乱 1(0.7%)	
怒り 24(16.6%)	後悔 13(9.0%)	自己嫌悪 4(2.8%)	不満・不信 3(2.1%)	はずかしい 2(1.4%)	拒否感 2(1.4%)

表 感情の分類